

Title	他児のいざこざへの保育園児の介入行動
Author(s)	安田, 純; 日野林, 俊彦
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2009, 35, p. 99-117
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/9900">https://doi.org/10.18910/9900</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 他児のいざこざへの保育園児の介入行動

安田 純・日野林 俊彦

### 目 次

1. はじめに
2. 方法
3. 結果
4. 考察



## 他児のいざこざへの保育園児の介介入行動

安田 純・日野林 俊彦

### 1. はじめに

子ども同士のいざこざ(*conflict*)は、言語、認知、社会性、道徳性など様々な能力の発達を促すことが指摘されている (Hay, 1984; 齊藤・木下・朝生, 1986)。また、いざこざは個人内部の葛藤とは異なり、必ず2者以上の間で起こる (Hay, 1984) ため、他児との相互作用の調節が不可欠となり、それが仲間関係の発達にも影響している (高橋, 1984)。子どもたちは、いざこざを通して自分の要求を知り、同時にその解決のプロセスを通して、他者や社会を知るのである (藤崎, 1999)。そこには、自己主張、自己抑制等、子どもの様々な能力の発達の表れがみられる。そのため、これまでに乳幼児のいざこざに関しては、その発達的变化や社会的関係による影響等の観点から多くの研究がなされてきた。

過去に行われた幼児のいざこざに関する研究を総覧した Hay (1984) によると、1歳半から5歳にかけての乳幼児のいざこざは、いずれの年齢においても概ね1時間当たり数例であり、無藤・内田 (1982) も同様の結果を示している。どのような相手といざこざをするのかを調べた研究では、親密でない相手よりも親密な相手との間でより多くの意見の衝突が見られる (山本, 1995) とするものと、その逆の結果を示しているもの (Green, 1933) とがある。また、保育所等のクラス内で月齢の低い児は、1年を通して異議を唱えることよりも唱えられることのほうが多い (本郷, 1995; 1996) ことが明らかになっている。攻撃性の視点から幼児のいざこざをみると、攻撃行動を頻繁に示す児は仲間から拒否されることが示されている (Dodge, Coie, Pettit, & Price, 1990)。一方で、攻撃を受ける児は、適応困難を招く恐れがあることが指摘されている (Crick, Casas, & Hyon-Chin Ku, 1999)。すなわち、いざこざは他者との相互作用が必要であるがために、社会的な能力を発揮する状況であるとともに、その後の仲間との社会的な関係に深刻な問題を引き起こす恐れのある状況でもある。

いざこざの原因については、数多くの研究で年齢的な差が認められており、幼少期であるほど物や場所の占有をめぐる物理的な原因のいざこざが多く、成長するにつれ、不快な関わりかけや規則、信念など社会的な原因のいざこざが増えるという (Hay, 1984; 加用, 1981; 齊藤ら, 1986)。そして、4歳半以降7歳齢くらいまでの間に、物理的な原因と社会的な原因で起こる争いの割合はほぼ半々になる (Shantz & Shantz, 1985)。

いざこざの手段として挙げられる行動は攻撃行動である。攻撃性の性差について取り上げた研究は多く、幼児期の攻撃性の性差について総覧した Maccoby & Jaclin (1974) は、男児の攻撃性の高さを示す論文が圧倒的に多かったと報告している。また、Sackin &

Thelen (1984) の研究でも、4歳9ヵ月から6歳6ヵ月の幼児のいざこざにおいて、男児同士のいざこざは女児同士のいざこざの約1.4倍の事例数が観察されている。しかしながら、いざこざにおいてみられるものは、他児に直接的に攻撃するものだけではない。男児と女児の攻撃性の違いについて、Crick & Grotpeter (1995) は、相手を叩く、蹴る等の直接的に攻撃する「直接的攻撃」と、仲間関係を操作することによって相手に危害を加えることを意図した攻撃行動を「関係性攻撃」と分類して定義している。この関係性攻撃は小学校中学年以降、女子の間で多く見られるようになるとしている研究がある (Cairns, Cairns, Neckerman, Ferguson, & Gieripty, 1989)。幼児同士のいざこざにおいては、直接的攻撃は女児よりも男児に多くみられるものの、関係性攻撃における性差は認められていない (磯辺・佐藤, 2003) とする研究と、児童期と同様に、女児に、より関係性攻撃がみられたとする研究がある (畠山・山崎, 2002)。これら攻撃に関する研究には、攻撃する側もしくは攻撃される側のいずれかに焦点を当てたものが多く、双方の仲間関係から攻撃行動を捉えることの必要性が指摘されている (畠山・山崎, 2002)。

3歳齢から5歳齢の幼児を対象に、親密さの観点からいざこざの解決方略について調べた白石 (1992) は、幼児は仲の良い友達とは、相手との関係を維持するために何とかしていざこざを解決しようとするとして述べている。さらに、親密さと仲直りについて研究した Butovskaya & Kozintsev (1999) が、友達間のいざこざよりも、非友達間のいざこざのほうが頻繁に仲直りしていたと報告している。その一方で、いざこざを示した幼児同士がいったん距離を置いてしまうと、友達か友達でないかは仲直りの生起には影響していなかったという結果もある (Verbeek & de Waal, 2001)。

以上のように、いざこざを対象とした研究の多くは、いざこざが発達的にどのように変化するのか、いざこざに関わっている児の両者間の社会的関係あるいは、仲間内における地位はどのようなものであるかについて明らかにしているものであった。しかし、集団内でいざこざが生じた場合、そのいざこざは当事者のみで展開されるのみならず、周囲にいる他の乳幼児にも拡大する。例えば他児によるいざこざへの介入は仲直りの一つの要素となりうることを示されており、他者の存在は、いざこざの様相をより複雑にしているものと捉えられる。

乳児のいざこざには、第三者、特に保育者の介入が頻繁に見られるが、子どもの年齢が大きくなるにつれ、大人の介入の数や働きかけは変化する。例えば、加用 (1981) は、乳児に対してはほとんどのいざこざで保育者の介入が見られ、保育者は当事者以外の子どもにはあまり注意を払わず、もっぱら当事者に理由を尋ねようとするが、幼児期になると保育者の介入数は減り、介入した場合には、周りの子どもも交えて事の真相を明らかにすることに努めようとするとして述べている。幼児の争いに対する保育士の介入率について、朝生・斎藤・萩野 (1991) は、1歳半以降に保育士の介入率が高くなったと報告しており、また、玉井・本郷・杉山 (1992) は、1、2歳児クラスにおける、物をめぐる争いへの保育士の介入内容は、子どもの年齢に応じて変化したと報告している。

幼児は2歳齢頃になると、他者がいなくても他者の期待に沿った行動がとれるように

なり、自己統制 (*self-control*) の段階を迎える。自己統制とは、その場の状況や自己の衝動に駆られることなく、目標に向かって持続的に自分の行動を組み立てたり、調整していくような自覚的な営みのことである (柏木, 1988)。このような自己統制能力が発達する2歳齢頃から、幼児は他児同士のいざごに介入を示すようになり、2歳半ばを過ぎる頃には、単なる加勢という介入ではなく、もっと中立的な介入も見られるようになる (玉井ら, 1992)。その一方で、2歳齢から7歳齢の幼児・児童のいざごに対する第三者の介入についての研究を比較した Butovskaya, Verbeek, Ljungberg, & Lunardini (2000) によると、低年齢の幼児は当事者の一方の味方になるような介入方略をよく示しており、いざごを鎮めようとするような中立的介入はまれであったという。いざごにおける第三者の役割について、過去に他者のいざごに介入した経験について小学生にインタビュー調査をした Chaux (2005) によると、すべてのいざごのうち、第三者の存在があるいざごが73%であり、そのうちの65%で第三者は他者のいざごに積極的にかかわっていたが、高学年の児童ほど他者のいざごにかかわることを避ける傾向にあったという。また、彼は、第三者の介入行動は、いざご当事者同士の親密さではなく、第三者と当事者との親密さからの影響を受けると述べている。

第三者の行動はいざごの当事者の行動にも影響を与え、当事者間の仲直り行動が生起する一つの要因となると同時に、相手からの仲直り行動を受け入れる要因ともなることが示されている (Fujisawa, Kutsukake, & Hasegawa, 2005)。また、4、5歳齢の幼児では、当事者同士に仲直りが見られた場合に比べ、仲直りが見られなかった場合に、第三者である幼児によるなぐさめ行動がより多く生起することが報告されている (Fujisawa, Kutsukake, & Hasegawa, 2006)。このように、いざごの非当事者である幼児の介入によって当事者の仲直り行動が促進されたり、当事者に仲直り行動がみられない場合になぐさめ行動が生起しやすいことから、いざごの非当事者である幼児の介入が、幼児の仲間関係の維持に対して重要な役割を果たしているといえるだろう。

友達同士のいざごを発見した第三者の子どもにもっとも多い方略は、当事者のどちらか一方の味方になること、次に、平和的な手段でいざごを解決させようとする、そして、傍観することである (Chaux, 2005)。当事者のどちらか一方の味方になるという介入の仕方は、第三者が当事者の一方とより親しい場合に用いられやすいことも報告されている。さらに、友達のいざごを発見した場合にどのように対処するのが適切であるかという質問を小学生にしたところ、低学年の児童はいざごを鎮めようとするが、高学年の児童はいざごを避ける傾向にあり、男児よりも女児のほうがいざごを避ける傾向が強かったと述べている (Chaux, 2005)。

これまで述べてきたように、子どもは他児のいざごに介入するだけでなく、傍観する、もしくは避けるといった行動も示す。また、介入する際には、当事者の行動や当事者との親密性に応じて異なる介入の仕方を示す。すなわち、いざご場面におけるこのような子どもの行動の多様性は、すでに築かれている仲間関係を反映したものであると考えられる。このように、いざご相手の児だけでなく、その周囲の児がどのような行動を

示すのか明らかにし、また、周囲の児の行動が彼らの仲間関係といかなる関連があるのかを示すことは、幼児の社会性の発達を理解するうえで重要なことであると思われる。

以上のことから、本研究では、他者の行動と状況の両情報を利用し、他者の特性を考慮に入れて感情を推察する者が多くなる5、6歳齢(朝生, 1987)の児を対象とし、集団保育場面における幼児のいざごについて検討する。その際、いざごの非当事者である幼児が、どのような場合にどのように介入するのか、その特徴や方略に特に注目する。そして、非当事者の行動を明らかにするによって、第三者の存在や行動が、いざごに対して具体的にどのような意味を持ち、幼児の仲間関係の成立や維持にどのように役立つのかを検討することを目的とする。

## 2. 方法

本研究の観察対象者は大阪市内の保育園の5歳児クラスに所属する38名(男児19名、女児19名、平均5歳10ヵ月)と保育士2名であった。本研究の観察は、午前9時頃から午後5時頃までの間の室内自由遊び時間、および、お絵描きなど自由遊びに準ずる時間に行われた。観察は、後述するスキャンサンプリングおよびイベントサンプリングを用いて行われた。観察者は、対象クラスに所属する児の過半数が室内で自由に遊んでいる状態で、教室全体が見渡せるよう教室の隅に立ち、以下に示す手続きに従って観察を開始した。

観察者が教室に入った時点ですでに自由遊びが行われている場合は、観察者の入室した5分後より観察を開始した。観察開始時において、クラスのすべての児を対象とし、児の近接関係をデータシートに記録した。クラスルーム内において、二者以上の体の一部が1m以内にある児同士を近接状態にあると定義し、その状態にある児同士の名前を記録した。以後15分ごとに、自由遊び場面が終了するまで同様の手続きにより観察を行った。この観察をスキャンサンプリングによるデータとして扱った。スキャンサンプリング中に後述するイベントが生じた場合は、スキャンサンプリングによる観察を中止し、イベントの観察を優先した。

上記のスキャンサンプリングによる観察の終了後、観察者は教室の隅に立ち、デジタルビデオカメラを用いて教室全体を撮影した。撮影中、児による他児への身体攻撃、言語攻撃、威嚇、物や場所の占有(Table 1)のいずれかを発見次第、攻撃を行った児の声を聞き取ることでできる距離まで接近し、攻撃を行った児を中心とした半径1m内が映るようにビデオ撮影を行った。以下、攻撃行動を行った児を「開始者」、攻撃行動を受けた児を「受け手」とする。本研究では「直前に自分に対して攻撃行動を示していない他児に対して、身体攻撃、言語攻撃、威嚇、物や場所の占有のいずれかが観察され、それに対し1名以上の幼児が泣いた場合もしくは抵抗の動作や表情を示した場合」をいざごの成立とした。以後、いざごの成立時の開始者および受け手を当事者とする。そして、「直前に自分に対して親和的な行動を示していない他児に対して、謝る・親和的な相互交渉を行う・一緒に遊ぶ・相手に触る・物を提供または共有する・物以外のものを提供

する」のいずれかの行動が観察された場合に仲直り行動が生起したと定義し、それに対し、いざごの相手が「うなづく、微笑む、肯定的な発言をする」のいずれかの行動を示した場合を仲直りの成立と定義した。この定義をもとに、「当事者同士に仲直りの試みに関する行動が見られ、相手が仲直りを受け入れた場合」、もしくは「当事者同士の相互交渉が途絶えてから 10 秒以上経過した場合」にいざごが終了したとみなした。

Table 1 攻撃行動に関する行動カテゴリーとその定義

行動カテゴリー	定義
身体攻撃	叩く、押す、蹴るなど身体接触を伴う攻撃行動
言語攻撃	「あっちへ行け」、「嫌い」など言語を用いて相手を非難したり抗議したりする攻撃行動
威嚇	にらむ、叩くふりをするなど身体接触を伴わない攻撃行動
物や場所の占有	相手の所有物や所有場所を許可なく占有する行動

攻撃行動が観察されたのち、受け手が開始者に対してかかわりかけを行った場合は、開始者と受け手を中心として半径 1m 内が映るようにビデオ撮影を行った。また、攻撃行動が観察されたのち、開始者と受け手の間に相互交渉が見られず、開始者と受け手以外の児または保育士が開始者もしくは受け手に対してかかわりかけを行った場合は、かかわりかけを行った児もしくは保育士とその交渉相手を中心として半径 1m 内を撮影した。観察者は、開始者、受け手、および彼らのどちらか一方の 1m 内に近接していた児の名前、発話内容を音声でビデオに記録した。いざごが終了した場合をもってイベントの終了とし、観察者は再び教室の隅に戻って教室全体を撮影した。なお、以上の定義に従ったいざごが生起した場合、そのいざごの当事者以外の、教室内に居るすべての児および保育士を、以後「第三者」とする。

いざごが生起している場合に、第三者が、いざごが行われている方向に視線を固定することを目撃行動とし、目撃行動を示した児がいた場合は、その児の名前を観察者が音声によりビデオに記録した。

記録したイベントのうち、いざごに発展した事例のみを本研究の分析の対象とした。上述した観察手続きにより得られたいざごのビデオデータから、一連のいざごについて、1) 当事者、目撃者および傍観者、2) いざごに対する介入の有無および介入内容、について以下の定義に基づき、全生起法 (Altmann,1974) による記録を行った。

いざごの当事者になった回数を見ごとに計算した。3 人以上がいざごの当事者であった場合も当事者ごとにそれぞれ 1 回とカウントした。また、それぞれのいざごについて、当事者同士がいざごの生起時に一緒に遊んでいたか否か分類した。当事者の



行動について、「声を出して泣く」「抵抗しながら第三者を見る」「声を出して第三者に助けや同意を求める」行動を示した場合、これらの行動を、当事者が第三者に対して援護を求めているとし、求援サインと定義した。この求援サインの有無および内容と仲直り行動の有無および仲直り行動の受け入れを記録した。あるいざごこの最中に当事者双方が求援サインを示した場合、当事者それぞれについて求援サイン1回とカウントした。また、同一のいざごこにおいて、同一の当事者が複数の求援サイン内容を示した場合は、それぞれの内容について1回とカウントし、同一のいざごこにおいて、同一の当事者が同一の求援サイン内容を複数回示した場合は、複数回のカウントを行わず1回とカウントした。

目撃者について、目撃行動を示した児ごとにその回数をカウントした。あるいざごこに対して同一の児が複数回目撃行動を示した場合は、複数回のカウントは行わず、1回とカウントした。

第三者が他児のいざごこを3秒以上注視した場合を傍観行動とし、傍観行動を示した児ごとにその回数をカウントした。あるいざごこに対して、同一の児が傍観行動を行ったのち傍観をやめ、その後再び傍観行動または目撃行動を行った場合は、複数回のカウントは行わず、傍観1回とカウントした。

本研究においては、第三者がいざごこ当事者のうちどちらか一方の児の半径1m以内において、もしくは、いざごこ当事者の半径1m以内に接近してきて、いざごこに対し、非言語的行動または言語による働きかけを行った場合に、介入が生起したと定義し、介入を行った者を介入者とした。介入者の、他児のいざごこに関する相互交渉が10秒以上途絶えた場合を介入の終了とした。介入行動に関して、介入を行った児または保育士の名前、介入方略、介入内容を特定した。介入方略については、いざごこの最中に攻撃を受けた被害者をなぐさめたり、「殴ったらあかん」と攻撃行動を示した児をなじったりするような、当事者に直接関わらせる介入を直接的介入、保育士を呼びに行くなどの当事者に直接関わらない介入を間接的介入とした。なお、分析に際しては、直接的介入が生起した事例のみを介入事例として扱った。児の介入内容は、「連合」「中立」「保身」「なぐさめ」「不明」の5つに分類された (Table 2)。児の介入内容について、1つのいざごこに対して複数の内容が観察された場合、それらすべてのカテゴリーに関して1回がカウントされた。また、保育士による介入の場合は、内容は特定されなかった。

本研究の観察は、2006年7月26日から10月30日までの間、観察者が保育園を週3日程度訪問して行われた。本研究における総観察日数は27日間であった。スキャンサンプリングによる総観察回数は66回、観察回数の1日あたりの平均は約2.4回であった。イベントサンプリングによる観察を行った総日数は18日間、総観察時間は765分、1日あたりの観察時間の平均は約42分であった。

Table 2 介入方略および介入内容に関する行動カテゴリーとその定義

行動カテゴリー	定義
連合	当事者のどちらか一方の味方になる
中立	当事者双方を非難する、いざごの内容や理由を把握しようとする
保身	「俺は入れてあげてるよな？」など、自分の立場を確認する
なぐさめ	体をなでる、「大丈夫？」と聞くなど、当事者の一方に対して親和的な行動をとる
不明	上記の介入内容に当てはまらない介入

### 3. 結果

本研究の観察対象となった5歳児クラスにおける総観察時間は765分であり、観察されたいざごの総事例数は273事例であった。すなわち、5歳児クラスにおける10分間あたりのいざご事例数は平均3.6事例であった。273事例のうち、当事者の名前および行動、近接児の名前および行動、終結状態のすべてが観察できた事例は246事例であった。観察対象児38名について、全観察時間において、いざごの当事者となった回数の平均は14.3回(レンジ;0-50, SD=14.3)、他児のいざごを傍観した回数の平均は6.5回(レンジ;0-17, SD=4.1)、介入回数の平均は4.6回(レンジ;0-14, SD=3.6)であった。いざごの当事者の性別について、当事者すべての性別が記録できた事例は262事例であった。そのうち、当事者すべてが男児のみで構成されたいざごが163事例、男児と女児で構成されたいざごが46事例、女児のみで構成されたいざごが53事例であった。

当事者がどのような相手といざごを起こしているのかを調べるため、各当事者について、相手との関係を次のように分類した。まず、いざご生起時に一緒に遊んでいた相手か否かで2つに分類した。次に、高親密児であるか低親密児であるかで2つに分類した。親密度の指標としては、対象クラスのすべての児38名について、スキャンサンプリングによる観察で得られた児同士の近接関係のデータを用いた。各児について、近接回数が総観察回数の10%以上の他児をその児にとっての高親密児、10%未満の他児をその児にとっての低親密児とした。各児について、高親密児の合計人数をその児にとっての高親密児数とした。すべての児における高親密児数の平均は5.1名(レンジ;1-11, SD=2.48)であった。以上のような手続きで、いざご生起時の当事者の関係を高親密児であったか、低親密児であったかに分類し、同時に、いざご生起時に一緒に遊んでいたか否かの2つに分類した。したがって、いざご生起時の両者の関係は「いざご生起時に一緒に遊んでいた高親密児」「いざご生起時に一緒に遊んでいた低親密児」「いざご生起時に一緒に遊んでいなかった高親密児」「いざご生起時に一緒に遊んでいな

かった低親密児」の4つに分類することができた。当事者の性別といざこご相手との関係との関連について、 $\chi^2$ 検定を用いて検討した (Table 3)。分析の結果、いざこご当事者の性別により、いざこご相手との関係に有意な偏りが認められた ( $\chi^2(3)=15.60, p<.01$ )。残差分析の結果、女兒は男児よりも「いざこご生起時に一緒に遊んでおり、高親密度である」相手とのいざこごが有意に多く、男児は女兒よりも「いざこご生起時に一緒に遊んでおらず、低親密度である」相手とのいざこごが多いことが明らかとなった ( $p<.05$ )。

Table 3 いざこごの当事者の性別と相手との関係

当事者	相手との関係			
	一緒に遊んでいた		一緒に遊んでいなかった	
	高親密児	低親密児	高親密児	低親密児
男児	95	41	68	191
女兒	60	21	17	57

$\chi^2=15.60, df=3, p<.01$

数値は人数を表す

第三者による介入行動の有無が記録できたいざこごは 263 事例であった。そのうち、第三者による介入が生起した事例は 122 事例 (46.4%) であった。この 122 の介入事例について、児による介入が生起したのは 95 事例 (介入率;36.1%)、保育士による介入が生起したのは 11 事例 (介入率;4.2%)、児と保育士による介入が生起したのは 16 事例 (介入率;6.1%) であった。児による介入が認められた 111 事例のうち「連合」がみられたものは 84 事例、「中立」がみられたものが 21 事例であった。「保身」、「慰め」はそれぞれ 2 事例、6 事例であり、「連合」が最も頻繁に介入行動としてみられた。

児による介入が生起した 111 事例について、男児による介入が生起したものが 76 事例、女兒による介入が生起したものが 25 事例、男児と女兒による介入が生起したものが 10 事例であった。

これらの事例について、当事者の性構成 (男児のみで構成、男児と女兒で構成、女兒のみで構成) と介入児の性別とに関連がみられるか Fisher の正確確率検定を用いて検討した (Table 4)。分析の結果、当事者の性構成と介入児の性別には有意な偏りが認められた ( $\chi^2(2)=52.32, p<.01$ )。残差分析の結果、3 種類すべての当事者の性構成において有意な偏りがみられ、当事者が男児のみで構成されている場合には、男児の介入が有意に多く ( $p<.05$ )、当事者が男児と女兒および女兒のみで構成されている場合には、期待値と比べて、男児の介入は有意に少なく、女兒の介入は多いことが示された ( $p<.05$ )。また、女兒のみで構成されている場合には、女兒による介入が有意に多いことが明らかになった ( $p<.05$ )。

Table 4 当事者の性構成と介入児の性別との関連

当事者の性構成	介入児	
	男児	女児
男児のみ	71	7
男児と女児	13	11
女児のみ	2	17

$\chi^2=52.32, df=2, p<.01$

数値は事例数を表す

当事者による求援サインの有無と児による介入の有無について、その両方が記録できた事例は 261 事例であった。これらの事例について、求援サインの有無と児による介入の有無とに関連があるか  $\chi^2$  検定を用いて分析した (Table 5)。分析の結果、求援サインの有無と児による介入の有無には有意な偏りが認められ ( $\chi^2(1)=44.76, p<.01$ )、当事者が求援サインを示したいざごは、当事者が求援サインを示さなかつたいざごよりも有意に多く児による介入が生起することが明らかになった。

Table 5 求援サインの有無と介入の有無との関連

求援サイン	児の介入	
	あり	なし
あり	48	12
なし	63	138

$\chi^2=44.76, df=1, p<.01$

数値は事例数を表す

当事者の求援サインの有無と児による介入の内容の両方が記録できたいざごは 111 事例であった。これらについて、求援サインが観察された場合とされなかつた場合とで、児による介入の内容、すなわち「連合」「中立」「保身」「なぐさめ」の各行動の有無に差が見られるか Fisher の正確確率検定を用いて検討した。分析の結果、すべての介入内容について、求援サインの有無との有意な偏りはみられなかつた (それぞれ  $\chi^2(1)=.0013, \chi^2(1)=2.49, \chi^2(1)=1.61, \chi^2(1)=.53$ , いずれも *n.s.*)。当事者の求援サインの内容、すなわち、「声を出して泣く」「抵抗しながら第三者を見る」「声を出して第三者に助けや同意を求める」の 3 つについて、これらの行動が観察された場合とされなかつた場合とで、児に

よる介入の有無に差がみられるか、*Fisher* の正確確率検定を用いて検討した (Table 6)。分析の結果、「声を出して泣く」「抵抗しながら第三者を見る」「声を出して第三者に助けや同意を求める」のすべての行動について、児による介入の有無に有意な偏りが認められ (それぞれ  $\chi^2(1)=13.87, \chi^2(1)=34.08, \chi^2(1)=21.42$ , いずれも  $p<.01$ )、当事者が「声を出して泣く」行動を示した場合、「声を出して第三者に助けや同意を求める」行動を示した場合、「抵抗しながら第三者を見る」行動を示した場合、それぞれの行動を示さなかった場合に比べて児による介入が有意に多く生起することが明らかになった。

「声を出して泣く」「抵抗しながら第三者を見る」「声を出して第三者に助けや同意を求める」の3つの求援サインの内容について、それぞれの行動の有無と、「連合」「中立」「保身」「なぐさめ」の4つの介入内容の有無について関連があるかどうか、それぞれ *Fisher* の正確確率検定を用いて検討した。分析の結果、「声を出して泣く」と「なぐさめ」との間、および「抵抗しながら第三者を見る」と「中立」との間に有意な偏りが認められ (それぞれ  $\chi^2(1)=13.14, p<.05, \chi^2(1)=3.03, p<.05$ )、当事者が「声を出して泣く」行動を示したときには、他児による「なぐさめ」行動が有意に多く生起し、また、当事者が「抵抗しながら第三者を見る」行動を示したときには、他児による「中立」介入が有意に多く生起することが明らかになった。

いざこざの終結状態が記録できたいざこざは250事例であった。そのうち、仲直りが成立したいざこざは69事例 (27.6%)、仲直り行動がみられ、それを相手が受け入れなかったいざこざは17事例 (6.8%)、仲直り行動が観察されなかったいざこざは164事例 (65.6%) であった。終結状態と児による介入の有無の両方が観察できた250事例について、児による介入の有無と終結状態とに関連があるか、*Fisher* の正確確率検定を用いて検討した (Table 7)。分析の結果、児による介入の有無といざこざの終結状態には有意な偏りはみられなかった ( $\chi^2(2)=5.91, n.s.$ )。

Table 6 求援サインの内容と介入の有無との関連  
(数値はすべて事例数を表す)

	児の介入	
	あり	なし
泣く	12	1
あり	99	149

$\chi^2=13.87, df=1, p<.01$

## b) 抵抗しながら第三者を見る

見る	児の介入	
	あり	なし
あり	23	0
なし	88	150

$\chi^2=34.08, df=1, p<.01$

## c) 声を出して第三者に助けや同意を求める

求める	児の介入	
	あり	なし
あり	32	11
なし	79	139

$\chi^2=21.42, df=1, p<.01$

Table 7 いざごの終結状態と介入の有無との関連

終結状態	児の介入	
	あり	なし
仲直り成立	30	38
仲直り不成立	12	5
仲直りなし	66	99

$\chi^2=5.91, df=2, n.s.$

数値は事例数を表す

## 4. 考察

いざごの相手との関係についての分析から、男児は女児よりも「いざご生起時に一緒に遊んでいなかった、低親密児」とのいざごが多く、女児は男児よりも「いざご生起時に一緒に遊んでいた、高親密児」とのいざごが多いことが明らかになった。3歳齢を過ぎる頃から、幼児の遊びには顕著な性差がみられるようになり、男児は人形

や布で遊ばなくなり、女兒は太鼓やボールで遊ばなくなる (田中・田中, 1986)。また、4歳齡児では、男児はブロック、大工道具、トラック、ピストルで遊ぶことが多く、女兒は人形、ままごと道具、ビーズなどで遊ぶことが多かった (Sears & Alpert, 1965) という報告もある。遊びのみならず、攻撃性においても性差が認められており、男児はより、直接的な攻撃を示し、女兒は仲間間の関係性を操作する「関係性攻撃」を示すとされる (畠山・山崎, 2002)。すなわち、男児は移動を伴う攻撃的な遊びをより示すため、自分が遊んでいるグループ以外の児と接触する可能性が比較的高いと考えられる。そのために、いざこざ生起時に一緒に遊んでおらず、親密度の低い幼児とのいざこざが頻発したと思われる。一方女兒は、移動を伴わない静かな遊びを好むことから、必然的にいざこざの相手も一緒に遊んでいた児が多かったと考えられる。あわせて、本研究の結果より、男児のいざこざは遊びとは異なった文脈で突発的に生起するものであるのに対し、女兒のいざこざは遊びの文脈の中で生起するものであることが示唆される。そして、本研究においては、いざこざの様相だけではなくいざこざへの介入にも性差が認められた。いざこざへの介入の分析より、男児のいざこざには男児が介入し、女兒のいざこざには女兒が介入するという関係が顕著であった。3歳半ば頃より遊びにおいて異性よりも同性と過ごす時間のほうが多くなる (Hartup, 1988) という、親和的な関係性に与える性別の要因が、他児の否定的な関係性への関心という形でも示されたことは、この年齢における、性別意識の高さを示しているものと思われる。

いざこざ当事者が求援サインを示した場合には介入が生起しやすく、特に当事者が「泣いた」場合は他児による「なぐさめ」介入が、当事者が「他児を見た」場合は他児による「中立」介入が生起しやすいことが明らかになった。「泣く」はいざこざ当事者の優劣関係が明確になるため介入児は「なぐさめ」を示しやすく、他者に直接的に助けを求める意味合いの弱い「他児を見る」が生起した場合には「中立」介入が生起しやすかったと考えられる。幼児は、6歳齡になると他者の行動と状況の両情報を利用して他者の感情を推察できるようになる (朝生, 1987) ため、非当事者である幼児は、当事者が自身に対してどのような行動を期待しているのかをいざこざ当事者の情報から判断し、介入するか否か、また、介入する方略を変化させていたことが示唆される。あわせて、当事者が泣いた場合、泣かなかった場合に比べて非当事者である幼児がなぐさめ行動を示しやすかったのは、葛藤場面において泣くという行動がもつインパクトの強さが考えられる。乳児は他者の注意をひくために泣くという手段をとるが、4歳齡頃になると、人前では泣くのをじっと我慢するようになる (藤崎, 1999) ため、5、6歳齡児が泣いた場合には、なんらかの危険や恐怖が伴っている可能性が高い。すなわち、この年齢の幼児は他児が泣くということが、通常の事態ではないと捉えていることが推察できる。また、Strayer & Strayer (1984) が、争いの終結時に敗者が見せる、金切り声をあげて泣く、縮こまるなどの典型的な行動は、勝者に対し服従の意を示すサインであると述べていることから、5、6歳齡児のいざこざにおいて、当事者の一方が泣くという行動を示すことによ

って、第三者から見て勝者と敗者が明確になり、敗者と思われる児に対するなぐさめ行動が生じやすかったのだと考えられる。一方、他児を見るという行動は、泣くという行動や、助けや同意を求めるといった行動に比べて、他者に直接的に助けを求めている意味合いが弱く、当事者の状況や心情が推察しにくいと考えられる。そのため、当事者が抵抗しながら他児を見る行動を示した場合の介入は、いざごの内容や理由を把握したり、当事者双方にとって平等な中立的な介入であったものと考えられる。

以上のことから、5、6歳児が、目の前で展開されているいざごに含まれる様々な情報を考慮することなく介入するのではなく、当事者の行動や状況から、そのいざごに介入するかどうかや介入内容を判断していることが窺える。

しかしながら、先行研究において示されたように他児によるいざごへの介入が当事者の仲直りの要因となる(Fujisawa et al., 2005)ことは本研究においては示されなかった。これは、本研究の介入に「連合」が最も多く見られたことによるものであると思われる。「連合」は当事者の一方に加担する行動であり、これにより、いざごがより複雑化するため、いざごの終結が仲直りに収束しなかったのであろう。当事者のどちらか一方の味方になることが友達同士のいざごを発見した第三者の子どもにもっとも多い方略であることはこれまでも示されている(Chaux, 2005)。いざごのより詳細な分析により「中立」的な介入がいかなる状況で生じやすいのか明らかになるとと思われる。これらに焦点を当てた分析を行うことは今後の課題とする部分である。

本研究より、当事者も他児の存在を取り入れながらいざごを進めている側面が明らかになった。その一方で、当事者以外の児は、他児との関係性やその時の状況を考慮しながらいざごに介入していることが明らかとなった。幼児期後半には、幼児は、自分がかかわりかけようとしている児についての情報のみならず、それ以外の児についての様々な情報を取り入れながら自身の行動を選択し、仲間関係を調節しているといえる。親和的に仲間と関係を展開すること、あるいは、他者と否定的な関係を持って、自身の自己抑制能力、自己主張能力を発達させるといった、直接的に他者と関わり合うことによって、幼児の社会的関係は発達するとされる。本研究において、他者間の関係に介入する場合にも幼児の社会的関係の影響や他児の状況を考慮している可能性が認められ、行動を決定する要因がより複雑になる幼児後期の特徴が現れたものと思われる。これらの経験もまた、幼児の社会性の発達に影響を及ぼしていると考えられる。

## 謝辞

本研究は比較発達心理学研究分野における共通テーマである「乳幼児の社会的発達の行動学的研究」に基づき、南 徹弘名誉教授を中心として企画、立案、実施された。本稿をまとめるにあたり南 徹弘名誉教授より多大な助言を頂いた。ここに感謝の意を表します。また、本稿は上記の研究の一部を構成する大阪大学人間科学部平成 18 年度卒業論文「自由遊び場面における 5・6 歳齢保育園児のいざごへの介入行動」(佐分利幸



世) をもとに、データを再検討し、まとめ直したものである。本研究の遂行にあたり、多大な協力を頂いた研究室スタッフと学生諸君に感謝します。また、本研究に御協力頂いた保育園の皆様、そして子どもたちに感謝の意を表します。

## 文献表

- Altmann, J. (1974), Observational study of behavior: Sampling methods. *Behaviour*, 49, 227-267.
- 朝生あけみ (1987), 「幼児期における他者感情の推測能力の発達—利用情報の変化」, 『教育心理学研究』, 35, 33-40.
- 朝生あけみ・斉藤こずゑ・萩野美佐子 (1991), 「いざこざ場面における2~3歳児の方略」, 『日本教育心理学会第33回大会発表論文集』, 93-94.
- Butovskaya, M., & Kozintsev, A. (1999), Aggression, friendship, and reconciliation in Russian primary schoolchildren. *Aggressive Behavior*, 25, 125-139
- Butovskaya, M., Verbeek, P., Ljungberg, T., & Lunardini, A. (2000), A multicultural view of peacemaking among young children. In: Aureli, F., de Waal, F. B. M., (Eds.), *Natural conflict resolution*. Berkeley, CA: University of California Press, 243-258
- Cairns, R.B., Cairns, B. D., Neckerman, H. J., Ferguson, L. L., & Geriépy, J. (1989), Growth and aggression: 1. childhood to early adolescence. *Developmental Psychology*, 25, 320-330.
- Chaux, E. (2005), Role of third parties in conflicts among Colombian children and early adolescents. *Aggressive Behavior*, 31, 40-55
- Crick, N. R., Casas, J. F., & Hyon-Chin Ku. (1999), Relational and physical forms of peer victimization in preschool. *Developmental Psychology*, 35, 376-385.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995), Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722.
- Dodge, K. A., Coie, J. D., Pettit, G. S., & Price, J. M. (1990), Peer status and aggression in boy's groups: Developmental and contextual analyses. *Child Development*, 61, 1289-1309.
- Green, E. H. (1933), Friendship and quarrels among preschool children. *Child Development*, 4, 237-252.
- 藤崎春代 (1999), 「第6章 社会的認知の発達」, 内田伸子・臼井 博・藤崎春代 (編), 『乳幼児の心理学』, 有斐閣, pp. 109-127.
- Fujisawa, K. K., Kutsukake, N., & Hasegawa, T. (2005), Reconciliation pattern after aggression among Japanese preschool children. *Aggressive Behavior*, 31, 138-152
- Fujisawa, K. K., Kutsukake, N., & Hasegawa, T. (2006), Peacemaking and consolation in Japanese preschoolers witnessing peer aggression. *Journal of Comparative Psychology*, 120, 48-57.
- Hartup, W. W., Laursen, B., Stewart, M. I., & Eastenson, A. (1988), Conflict and the friendship

- relations of young children. *Child Development*, 59, 1590-1600.
- 畠山美穂・山崎 晃 (2002), 「自由遊び場面における幼児の攻撃行動の観察研究, 攻撃のタイプと性・仲間グループ内地位との関連」, 『発達心理学研究』, 13, 252-260.
- Hay, D. F. (1984), Social conflict in early childhood. In G. Whitehurst (Ed.), *Annals of child development*, 1, Greenwich, CT: JAI, pp. 1-44.
- 本郷一夫 (1995), 「「異議」に関する研究 (2) —年齢による変化と集団の構成要因からの分析—」, 『日本教育心理学会第 37 回大会発表論文集』, 403.
- 本郷一夫 (1996), 「2 歳児集団における「異議」に関する研究 —子どもの年齢と年齢差の影響について—」, 『教育心理学研究』, 44, 435-444.
- 磯部美良・佐藤正二 (2003), 「幼児の関係性攻撃と社会的スキル」, 『教育心理学研究』 51, 13-21.
- 柏木恵子 (1988), 「第 2 章 自己についての認識の成立と展開」, 『子どもの「自己」の発達』, 東京大学出版, pp. 42-78.
- 加用文男 (1981), 「幼児のケンカの心理学的分析」, 『現代と保育』9. ささら書房, pp. 176-189.
- Maccoby, E. E., & Jacklin, C. N. (1974), *The Psychology of sex differences*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- 無藤隆・内田伸子 (1982), 「幼児初期の子ども同士のいざごぎの発生と解消」, 『日本心理学会第 24 回大会発表論文集』, 690-700.
- Sackin, S., & Thelen, E. (1984), An ethological study of peaceful associative outcomes to conflict in preschool children. *Child Development*, 55, 1098-1102.
- 斉藤こずゑ・木下芳子・朝生あけみ (1986), 「第 3 章 仲間関係」, 無藤 隆・内田伸子・斉藤こずゑ(編), 『子ども時代を豊かに』, 学文社, pp. 59-111.
- Sears, R. R., & Alpert, R. (1965), *Identification in Child Rearing*. Stanford, Calif: Stamford University Press.
- Shantz, C. U., & Shantz, D. W. (1985), Conflict between children: Social-cognitive and sociometric correlates. In M. W. Berkowitz (Ed.), *Peer conflict and psychological growth: New directions for child development*. San Francisco: Jossey-Bass, 3-21.
- 白石敏行 (1992), 「幼児の仲間内地位と認知および行動の関係」, 『日本心理学会第 3 回大会論文集』, 60.
- Strayer, F. F., & Strayer, J. (1976), An ethological analysis of social agonism and dominance relations among preschool children. *Child Development*, 47, 980-989.
- 高橋たまき (1984), 『乳幼児の遊び—その発達プロセス—』, 新曜社.
- 田中昌之・田中杉恵 (1986), 『子どもの発達と診断 4 幼児期』, 大月書店.
- 玉井真理子・本郷一夫・杉山弘子 (1992), 「集団保育場面における子ども間のトラブルと保母の働きかけ—1~2 歳児クラスにおける物をめぐるトラブルについて—」, 『東北教育心理学研究』, 5, 45-59.

Verbeek, P., & de Wall, F. B. M. (2001), Peacemaking among preschool children: Peace and Conflict. *Journal of peace psychology*, 7, 5-28.

山本愛子 (1995),「幼児の自己主張と対人関係—対人葛藤場面における仲間との親密性および既知性—」, 『心理学研究』, 66, 205-212.

## Preschoolers' Intervention in Peers' Conflict

Jun YASUDA and Toshihiko HINOYASHI

This research investigated how a child who is a third party intervenes in a conflict under what kind of circumstances by evaluating the features and tactics of peer interactions in a nursery school. Participants were thirty-eight 5-year-olds and two teachers. They were studied during free play in the classroom. The details of infantile conflict and interventions by third parties were recorded. The total observation time was 765 minutes and 273 examples of conflict were observed. It became clear that there were more conflicts with partners who were playing together at the time the conflict occurred, and a higher degree of intimacy among girls than among boys. Furthermore, there are more conflicts with partners who were not playing together when conflict occurred, and there was a lower degree of intimacy among boys than among girls. There were 111 examples of conflicts in which intervention by third parties. "Union" was the most frequent intervention. It became clear that there was considerable intervention by boys when all individuals involved in the conflict were boys, and there was considerable intervention by girls when all involved individuals were girls. It is suggested that conflicts occur among boys suddenly regardless of play and that conflicts among girls occur within the context of play. And it seems that there is a factor related to sex since affinity relations were also shown in the form of concern about other children's negative relationships, indicating the height of the sex consciousness in this age. When children involved in a conflict showed signs of asking for help, intervention in the conflict by third parties was seen more frequently. Especially, when a child involved showed "crying", other children usually showed "consolation" and when the involved children showed "looking at third party", other children mostly showed "neutrality". It was suggested that a five- or six-year-old child does not intervene without considering various aspects of information included in the conflict occurred at hand, decides whether or not to intervene in the conflict and bases the tactics of intervention either on the actions of children in the conflict or on the situation.

